

「底が突き抜けた」時代の歩き方 341

「おれの24年間を無駄だというのか」 -

拉致状況下で朝鮮人として生きてきたこと

北朝鮮に拉致された者のうち5名が24年後に帰国したが、人間がある日突然、訳も分からないままいきなり選択不可能な状況に放り込まれてしまったとき、どのように対応するものなのか。拉致被害者の一人として帰国した浜本富貴恵さん(47)は、10・18日付毎日新聞の記事によると、北朝鮮に拉致された直後は、「毎日泣いて日本に帰りたと思っていたが、ある時、プツンとふっ切れた」と訪れてくれた友人らに打ち明け、ふっ切れた後は「前向きな考えになり、朝鮮語の勉強を始めた。自分の生きる道はここしかないと思った」という。更に、地村保志さん(47)と拉致前に結納を交わしていた浜本さんは、北朝鮮でお見合い相手として何人かの男性を勧められたが断り、1年4カ月ぶりに地村さんと再会したその日のうちに結婚したことも語っている。

記事には、拉致された浜本さんと地村さんは招待所と呼ばれる別々の施設で暮らしていたが、互いに「相手は日本に帰った」と聞かされていたといい、生活ぶりについては「今の生活は子どももいて、家族のきずなが生まれ、幸せに暮らしている」と友人に語り、「満足している様子だった」と記されている。浜本さんが友人に語ったとされる「前向きな考えになり、朝鮮語の勉強を始めた。自分の生きる道はここしかないと思った」という心境告白は、おそらくすべての拉致被害者に共通する思いであったと察せられる。

神戸女学院大教授の内田樹が10・8付朝日新聞のエッセーで、「もし自分が拉致被害者だったら」、北朝鮮で生き延びるためにどうする? ということが「あまり言われない」として、こう記している。

「あらゆる協力を拒んで、収容所で憤死するという選択もあるだろう。でも、私なら何としても生き延びたい。北朝鮮で生き延びるためには、拉致の趣旨からして、対日工作に加担するという以外にはオプションがない。

私ならそれを選ぶ。それしか生きるチャンスがないのだから仕方がない。日本政府が救出のために何もしてくれないのなら自分ひとりの才覚で生き延びる以外にどういう道があるのか。

今回生存が確認された人たち、あるいは名前が出ていない被害者の中には、『帰るに帰れない』という人が含まれていると私は思う。そのことはあまり公言されない。被害者の家族たちへの配慮なのかもしれない。しかし、メディアに横溢するナイーブな同情を私は信用しない。そのような情緒的^{あういっ}反応はいつでも帰国者への陰湿な攻撃に転じうるからだ。

生き延びるために北朝鮮の政治工作にコミットした人がいたとしても、それを責める資格は私たちにはない。そのことを被害者の帰国を前に、国民的な合意とすることが必要だと私は思う。」

もし自分がそのような状況に置かれたら、どうするか、ということを考えずに得々と弁ずる人が多い中で、先の浜本さんの「自分の生きる道はここしかないと思った」という心境告白に照らしてみても、この意見は非常にまともなものであろう。この意見に重ねるようにして、私も想像力を働かせてみる。

浜本さんが「自分の生きる道はここしかないと思った」ということは、自分が選択不可能な状況に放り込まれてしまったことを漸く覚り、踏ん切りをつけたということにほかならない。もう二度と日本に帰れないのであれば、生きるためには「前向きな考えになり、朝鮮語の勉強を始め」なくてはならず、泣いてばかりはいられなかった。拉致された北朝鮮で「前向き」に生きることが、何らかのかたちで「対日工作に加担する」ことであるのは、先のエッセーで記されていた通りであろう。

いうまでもなくいくら生き延びるためとはいえ、北朝鮮の地で日本人が「対日工作に加担する」仕事に従事することには後ろめたさがあっただろうことも推測される。北朝鮮はその点も充分計算済みであったにちがいない。拉致被害者の蓮池薫さん（45）は帰国直後、兄の透さんとの口論で、「北朝鮮は日本に侵略された被害者なんだ」とか、「祖国の統一がいま何より大事」とか、「米国は帝国主義的で覇権主義的、小国を力でねじ伏せる覇権主義的な国家」とかの言葉を吐いて、目を合わせようとしなかったとマスコミに報じられていたが、なぜ、日本人の自分が拉致され、「対日工作に加担する」仕事に従事しなければならないのかという拉致被害者たちの深い疑問に、北朝鮮がどのようにして説得したのか、その一端が蓮池さんの先の言葉に窺われる。

もう一つ、忘れてはならない重要なことは、今回の帰国者たちは日本に一時帰国できることなど夢にも思っていなかっただろうという点である。当事者のみならず、北朝鮮側も日本側も直前まで、拉致被害者の一時帰国など予想もしていなかったにちがいない。交渉の成り行きや拉致被害者の家族たちの熱心な取り組みによって、瓢箪から駒のようにして蓮池さんたちの一時帰国が実現したが、その時点でもあくまでも一時帰国であった、10日か2週間位すれば北朝鮮に帰っていかなければならない身の上であったことも踏まえなくてはならない。全く予期していなかった一時帰国であったなら、つまり、日本人としてよりも北朝鮮居住者として一時帰国している予定であったなら、北朝鮮や日本に対してどんなにいいたいことがあっても、無邪気さを装って口や表情に率直に出すことがどれほど危険なことであるかは、考えてみればすぐわかることである。臨戦態勢下の北朝鮮から無理矢理日本へ帰国させられて、わずか2週間後には北朝鮮には戻らなくてはならなかった5人に対する配慮や想像力が、メディア側にもあまりにも欠如していたのが今回の報道で感じられる。

それは、「帰国者はマインドコントロールされている」といった浅薄な調子に垣間見られる。選択不可能な状況下に生きている人間への考察を欠いた、学者バカ的な一文（静

岡県立大学講師西田公昭)が『サンデー毎日』(02・11・3)に掲載されている。「帰国者たちの言動をつぶさに見ると、彼らは強いマインドコントロールを受けていると考えられ、その洗脳状態を解くには、「帰国者たちが完全に安心できる環境を用意する必要がある」が、「今回の限られた一時帰国の間に、洗脳を解くのは絶望的と感じます」などと、専門家でなくともわかるバカげたことを述べており、彼の専門バカぶりは、洗脳を解こうとすることが北朝鮮へと戻って行くことになる帰国者をどれほど危険な状態に追いやるか、への想像力を全く欠如させていることにあらわれている。

洗脳というなら、帰国者たちはわずかの日本での滞在期間中に接触する日本人によって洗脳されることを恐れ、警戒していた筈であり、北朝鮮から「強いマインドコントロールを受けている」もなにも、北朝鮮で生涯暮らすのにできるだけ安全な環境を確保しようとするのは、人間の自衛本能からしても当然であっただろう。作家の小林信彦が『わが洗脳体験』と題するエッセーを、『週刊文春』(02・11・7)に書いている。

満州事変の翌年に生まれた東京下町の商家育ちの小林少年は、当時の日本国民のほとんどがそうであったように、「毎日が楽しく、今日はどのくらい、わが軍が勝ったかを知るために、朝刊を熟読」するような小学3年生を過ごし、「自分の国のやることはすべて正しいと信じきっているので、外地から一時帰国した叔父に中国兵斬殺の話を書いても、信念はびくともしない。日本軍に立ち向う連中、とくに暗黒失損は絶対の悪と信じて、疑わなかった。(ディズニー漫画の楽しさなど、とっくに忘れていた。)」

中学一年生になっても 洗脳 は長く強固で、「生れた家、町が、昭和20年3月10日の無差別爆撃で焼失し、原爆が二発おとされて、三発目はどこだと噂されても、信念はゆるがなかった。日本は明らかに負けてはいるが、正しさは日本側にある、と信じていた。」作家山中恒の自伝的小説『青春は疑う』の主人公透少年が敗戦を知り、負けたのは、「ぼくら臣民の力が足りなかったからだ」とか、「ぼくらは陛下にお詫びするために腹を切るべきなのだ」とまで思い詰めていくのと同じ軍国少年の痛々しい心情であった。負けると、「男は睾丸をちょん切られた上で、奴隷にされ、女はすべて強姦される。」というのが、当時の常識であった。

「昭和20年の8月15日は、決してドラマティックではなかった。夏休みの中の一日であり、しかも、ぼくは盲腸で苦しんでいた。

休みが終り、9月に学校が始まったが、今日、伝説となっているようなドラマティックなことはなにもなかった。教科書を墨で塗りつぶすこともなく、教師が『今まで嘘を教えてすまなかった』などと謝ることもなかった。暴力的な教師は依然として生徒を殴っていた。学校が東京でなかったせいもあるのだろう。

やがて、アメリカ軍がその市に進駐してきたが、逆らう者は一人もいない。商店の看板が急に英語になった。

学校で観に行く映画が『雷撃隊出動』からアメリカ製の『鉄腕ターザン』に変わった。日本人特有の 風 の向きが180度かわったことがいやでもわかり、ぼくの 洗脳 はゆっくり溶け始めた。

それでも、ぼくは納得できなかつた。少くとも、ラジオと新聞は大嘘をついたことを国民に謝罪すべきだと思っていた。

新聞の言葉づかいは戦時中と変らなかつた。晩秋のころだったか、占領軍によれば - という形で、日本軍の侵略行為のすべてが明らかにされた。自分たちの謝罪ではなかつた。

以後、ぼくはマスメディアをいっさい信用しないことにして、今日まで生きている。」

小林信彦は「洗脳」という死語をふたたび見かけるようになった。」と、冒頭からエッセーを切り出しているだけで、一言も「日本人拉致事件」に触れているわけではない。しかし、彼が「洗脳」という死語」をマスメディアが頻繁に登場させる風潮の中で、戦時中軍国少年であった「わが洗脳体験」を持ちだすことで何をいおうとしているかは明白である。洗脳について辞書には、「第二次大戦後の一時期、共産主義者でないものを、共産主義者に思想改造させたこと。」とあり、彼は、「この一時期」というのは朝鮮戦争と考えていいだろう。中国軍、北朝鮮軍につかまったアメリカ兵たちに共産主義教育が施された。」と注釈して、日本人の拉致被害者に重ねている。

しかし、洗脳には、「転じて、ある人の考え方（主義）を根本的に変えさせること。」というもう一つの字義があり、「これは新興宗教を連想すればいい。しかし、宗教だけではない。」と注釈を施して、彼は自分の場合は後者であって、「現実に、同じことが、わが大日本帝国においては、長期的かつ大がかりにおこなわれていた」と指摘する。今回の帰国者騒動に関して、彼が何をいいたいかはこれではっきりするだろう。帰国者たちの洗脳ぶりについてマスメディアはあれこれ騒ぐが、なに、洗脳されることについては戦時中の大半の日本国民に身の覚えがある筈である。よもや知らないなどとはいわせまい。もっとも洗脳は人間に付き物であって、洗脳は他の洗脳をもって溶かされる状態を繰り返していると思われるほど、人間は生存中洗脳と無縁ではありえない。洗脳ぶりが過剰か過少かの大きな相違はあるけれども、「日本人特有の風向き」に誰もが自分の生き方を左右されていることを考えると、たえず洗脳されながら自分はいまを生きている思ったほうがよい。

小林信彦はなにも戦時中の日本人が洗脳されすぎていることをあげつらっているわけではない。大体、国家（天皇制）イデオロギーに国民が洗脳されなければ、戦争などやれる筈がないから、日本人は少なくとも明治維新以降ずっと洗脳されつづけてきて大東亜戦争に突入するに至り、敗北してしまったのだ。問題はその後である。敗戦後日本人は自分たちが戦時中どのようにして洗脳されつづけてきたのかに真正面から向き合うことなく、「商店の看板が急に英語になり」、「学校で観に行く映画が『雷撃隊出動』からアメリカ製の『鉄腕ターザン』に変」わる中で、冬が過ぎればやがて春が巡ってくるような自然の移り変わりに身を委ねる感覚で、戦時中の洗脳状態を溶かしていったにすぎなかつた。つまり、アメリカ製のイデオロギーに洗脳されることによって、「わが大日本帝国」製のイデオロギーの洗脳状態から抜け出していったのだ。

戦後、「ラジオと新聞は大嘘をついたことを国民に謝罪」しなかつた。それは戦後も

大嘘をつきつづけているからだ。「占領軍によれば - という形で、日本軍の侵略行為のすべてが明らかにされ」るだけであって、日本人自らの手で「日本軍の侵略行為のすべて」を明らかにすることはなかった。それはいまでも続いている。「以後、ぼくはマスメディアをいっさい信用しないことにして、今日まで生きています。」と彼がいうとき、この言葉は当然、いまの「日本人拉致事件」報道にむかっても発されている。一つは、帰国者たちの洗脳ぶりにあーだ、こーだと口幅ったく説く者たち自身が、自分は洗脳されていないという思いこみを前提にしている夜郎自大ぶりであり、もう一つは、北朝鮮の非道ぶりを書き立て、言い立てる日本人自らがどれほど「日本軍の侵略行為のすべて」を明らかにしてきたのか、に対するあまりもの内省のなさである。

前者については、一時帰国（註 - この時点では永住帰国の話はまだ出ていなかった）の間に、帰国者たちの洗脳を解かれていく行為が彼らを北朝鮮でどのような窮地に立たせるか、ということへの一片の考察もなく、前述の大学講師が「今回の限られた一時帰国の間に、洗脳を解くのは絶望的」であり、「仮に洗脳状態から抜け出すことができたとしても、その過程では日本的な考えと北朝鮮的な考えが意識の中でせめぎ合い、精神的に追いつめられた状態になるでしょう」が、「ともあれ、彼らがあまりにも理不尽な経緯で過酷な現実を突きつけられ、犠牲になっている事実を思うと、気の毒でなりません」という、読者が別段違和や反撥を感じることはないその普通の物言いの中に、洗脳を受けている「気の毒」な者に対する、洗脳を受けていない立場からの発言が浮き彫りにされているように思われてならない。日本でもほとんど目立たないほどの緩やかな洗脳を被りながら、あなたは他人の洗脳状態を診断し、分析する社会心理学者として大学に職を得ているのではなかったか。

後者もまた、北朝鮮の悪を暴きたて、追求するマスメディアと、それに同調する日本人の唱和の高まりの中で大きく浮かび上がってきている。北朝鮮のあまりもの無法ぶりや非道さをあげつらう日本側は、一度も朝鮮半島で悪行を犯してこなかったような口ぶりなのだ。「日本人拉致事件」での被拉致者の家族の心痛を少しでも思いやるなら、50数年前の「朝鮮人強制連行」を思い起こし、同じ辛い目に遭ったその家族の心痛を思いやるうとするのが人間としての筋道ではないのか。そこに国境はない。哀しさや辛さに日本人、朝鮮人の区別はない。人間として泣き、笑い、怒り、楽しむ姿がそこにあるだけだ。「日本人拉致事件」に対して日本人として怒りを発するなら、どうしても公正さを欠いてしまうだろう。拉致事件は日本人として許されない以上に、人間として許されないのである。怒るなら、人間として怒るべきであり、そうすると、戦時中の日本人が人間として非道いことをやってきたことを改めて思い起こさざるをえなくなるし、隣国の人間を拉致するような政権下で圧政と貧困をしいられつづけている北朝鮮の人々の苦難の姿も目の前に押し迫ってくるにちがいない。

最近目にしたテレビ報道の一例を取り上げてみる。帰国者たちの歯の悪さについて、キムチが苦手だった地村保志さんが47歳にして総入れ歯であったことや、帰国中にほとんど全員が歯医者で治療を受けたことから始まって、北朝鮮の医療技術のレベルが非

常に低く、おまけに開業医がいないために日本で普通に受けられる歯科治療すら難しく、また気温の低い冬場ではビタミン摂取が不足気味になっても、食糧事情の悪化によって補えないという説明が続く。そのあと贅沢品とされる北朝鮮の一本の歯ブラシと歯磨き粉が目の前に置かれて、日本の歯磨き粉と較べてどれほど歯の健康によくない粗悪品が使用されているかが、歯の専門家によって解説されていく。そんな粗悪品すら北朝鮮の人々は買えずに、歯が抜けて50歳なのに80歳くらいに見える酷い生活を送っているというテレビ画面であり、見ている者の口から思わず「気の毒だね」という呟きが洩れてきそうなたつくりになっている。

「気の毒だね」という呟きには、どこか富者が貧者を高みから見下ろす憐れみを伴った傲慢さが付きまどっている。暖房のよく効いた居間でリラックスしながら、飢えと寒さで凍える難民がばったばたと次々に倒れていくテレビ画面を見て、「気の毒だね」と呟いてみせるのと全く同じ調子なのだ。だからといって、同じ人間とは思われない、かの国に生まれなくてよかった、と改めて胸をなでおろしたくなる人間のそのような姿を責める気は毛頭ない。他人の不幸をみて自分の幸福を感じるおぞましさと自分もけっして無縁ではないからだ。しかし、粗悪品の歯磨き粉すら買えない北朝鮮の人々の極貧の中に、敗戦直後の日本人の貧乏ぶりを見出してもよかったのではないか。敗戦直後から10数年間、学校給食用として家畜のエサである脱脂粉乳がアメリカから提供されたとき、敗者の日本人の哀れな子供たちを「気の毒だね」と見下ろす勝者のアメリカ人のまなざしが、我々の頭上を常に覆っていたのではなかったか。北朝鮮の人々の想像を絶する暮らしぶりをしきりに際立たせようとするテレビ画面に、同情などではなく、他人の家に土足で踏み入ってこれほどの貧しさなんですよ、よく生きていますね、耐えられますね、といった調子の度を超した愚弄と暴力しか感じられないのだ。

小林信彦が、「以後、ぼくはマスメディアをいっさい信用しないことにして、今日まで生きている。」というとき、もうマスメディアなどに踊らされずに自分の頭で考え、よく見極め、行動していくといっているように聞こえる。そう、自分の頭で考えない人は洗脳されていく。洗脳されている度合いだけ、自分の頭で考える必要がないからだ。自分の頭は自分が支配しなければ、必ず誰かが支配することになる。だからこそ、すべてを疑う必要が生じてくる。自分の頭で考えるということは、自分を取り巻いているすべてを疑うことであり、洗脳は一瞬も休むことなく我々の頭に忍び寄っていることを忘れてはならない。

蓮池薫さんが帰国した直後に5時間近く幼なじみの友人4人と議論し、「お前を北朝鮮に帰さない」と説得されて、「洗脳する気か」と反撥し、「おれの24年間を無駄だというのか」と、永住帰国を受け入れる意志は示さなかったと報道されている。日本人からすれば北朝鮮に洗脳されているとしか思われない蓮池さんの口から、たぶん強引に友人たちから詰め寄られて「洗脳する気か」という言葉が飛び出す背景には、帰国者全員が北朝鮮から帰国に際して洗脳されないようにという指導を強く受けていたからだと思われるが、それだけでなく、蓮池さん自身も友人たちの強引さにそう感じていたにち

がない。「植民地支配の勉強をし、祖国統一に協力しようと思った」とか、「朝鮮分断は日本に原因がある」と蓮池さんが語ったことは、北朝鮮が陰に陽に拉致被害者に対して施した一方的な洗脳教育の影響であるとしても、裏返すと、蓮池さんを含む拉致被害者全員が日本の植民地支配や朝鮮分断について、要するに、小林信彦の指摘する「日本軍の侵略行為 のすべて」が、日本の学校で教わらなかった問題と密接にかかわっている筈だ。

もちろん、拉致被害者だけでなく、戦後の日本人全員が「日本軍の侵略行為 のすべて」について学校で教わらなかった。小林信彦がいうように、「日本軍の侵略行為 のすべてが明らかにされた」のは占領軍によってであり、「自分たちの謝罪ではなかった」から、ほとんど学校で教わらなかった。蓮池さん（たち）がたぶん初めて大日本帝国による「植民地支配の勉強をし」という言葉は、戦後日本の歴史教育のありかたを根本から見直させるほどの問題を提出しているだろう。拉致被害者たちが北朝鮮の執拗な洗脳教育を免れえなかったとしても、もし日本の学校教育で戦前の「植民地支配」についていくらかでも教わっていたなら、北朝鮮の一方的な見方を相対化する視線を宿すことによって、易々と一方的に洗脳されてしまうことはなかったと推測される。

占領軍の手ではなく、戦後日本人の手で「日本軍の侵略行為 のすべて」を明らかにしていくことは、自虐的ではない。したがって、中国、韓国、北朝鮮が揃って一様にいいたてる戦前の日本の植民地政策について勉強することも、自虐的ではない。戦時中の蛮行について特に日本軍だけがやり玉にあげられなくてはならないいわれはないと思うが、もしいわれがあるとするとするなら、そのいわれについて多様な角度から勉強した上で、謝罪すべきであれば謝罪すればよいし、謝罪する必要のないものは当然謝罪なくてよい。まずは勉強が必要であり、相手のいい分に対していい返せるぐらいの見識を備えなくてはならない。北朝鮮の拉致被害者に対する洗脳教育は、戦前のイヤな部分に目を閉ざしてきている日本の歴史教育の自虐ぶりの盲点を衝いていることは間違いない。

日本の歴史教育だけでなく、拉致被害者個人の歴史についてもどう考えなくてはならないかという問いが、「おれの24年間を無駄だというのが」と応酬する蓮池薫さんの反撥の仕方の中に示されているのに気づく。蓮池さんがそうやり返すとき、おそらく「おれの24年間」のみを問題にしているわけではなかった。北朝鮮に拉致されるまでの日本人として過ごしてきた21年間に対する思いが心の底で疼いているのが、そこに透けてみえる。なぜなら、北朝鮮に拉致されて戦前の日本の植民地政策を勉強し、その誤りを思い知らされた時点で、“おれの21年間は無駄だった”として、朝鮮人になって南北の「祖国統一に協力しようと思った」という経過が、蓮池さんの45年の生涯の中に凝縮されていたからだ。生まれ育った日本人の21年間を北朝鮮によって否定され、24年ぶりに一時帰国すると今度は周囲から朝鮮人として過ごしてきた24年間を否定されるという、なんとも理不尽な事態に蓮池さんは直面していたのだ。

北朝鮮で日本人であることを否定され、一時帰国した日本で朝鮮人であることを否定された蓮池さんたち拉致被害者の24年間を、「失われた24年」とみるのは、『週刊ポ

スト』(02・11・8)のビートたけしである。「仮に被害者の子供や家族がニッポンに永住するようになって、生活を最初からやり直してっていても、24年間の空白はどうやっても取り戻せないんだからさ。北朝鮮で育った子供たちだって可哀相なんで、最初からやり直せばいいなんて簡単にいっちゃダメだよな。」と宣う。先々週(10・25)の同誌で彼は、「戦前のニッポンと同じで北朝鮮の国民は何も知らされてないんだろうし、洗脳させられ、統制されてるからああいう風になっちゃうんでさ。なんでもかんでも北朝鮮が悪いってなるとマズイよね。」とか、「なにかといえ、『將軍様のおかげです』だとか『首領様のおかげです』ってのも、あっちの人々の作法や形式になってるから、軍部に統制されてた戦前のニッポンみたいにおかしく見えるんだよな。/あれを見て自由社会のオレたちは笑ってるけど、よく見れば、ニッポンだって同じようなことをやってるんでね。街角でテレビのインタビューされてるニッポンの国民も同じような答え方かしねえじゃねえかってね。」と得意の口舌に乗って、「北朝鮮はみんな悪いって一辺倒になってる」日本の風潮に次のように水を差す。

「ニッポンの役人や政治家の言い方も一つの型にはまってるんで、それも作法なんで、テレビのニュース番組を見て誰かがいった方法を真似てさ。それを型にして、そのままオウム返しにしているだけなんで、北朝鮮と変わらないだろうってね。

いってみれば、ニッポン人が民主主義や資本主義に洗脳されてひたすら生きてるってだけでね。本当に自由に生きてるかっていうと、怪しいかもしれないぜってね。そうすると、それが果たして北朝鮮の国民と比べると幸せなのかなってね。

もっとわからないのは、イラクや北朝鮮は『悪の枢軸』で大量殺人兵器を持ちっやいけないうってけど、一番持ってるのはアメリカじゃねえかってね。そういう殺人兵器を売って儲けているのはどこの国なんだったの。

強い国が弱い国をいじめて、弱い国がもっと弱い国をいじめてるのと一緒なんだよな。だから、ニッポン人は『北朝鮮の人は可哀相』っていつてるけど、アメリカ人からいわせればニッポン人も可哀相なんでね。日米安保で沖縄なんて米軍基地だらけじゃないのってね。

そういうのを見ていると、ニッポンが北朝鮮を見て笑ってる場合じゃないんで、オイラたちのニッポンだって、しょせんはアメリカから痛めつけられているんじゃないかと思わないとね。」

ここでのビートたけしは、北朝鮮を鏡としてそこに映しだされるニッポンとニッポン人を観察しようとする芸がみられるが、蓮池さんたち拉致被害者の24年を「失われた24年」とみる彼の手付きには、ただ単にニッポンの生活が空白になっていたというそのまんまの意味あいしかなく、北朝鮮に拉致され朝鮮人になりきろうとしていた彼らの24年間は日本に生まれ育ってきた21年間を否定する歳月でもあったのに、日本への永住帰国によって今度はその24年間が否定されねばならなくなってくるという、丸太ん棒を突っ込まれるような宿痾^{しゅくあ}を呑み込まされた運命に翻弄されつづける残酷さはみえてこない。「24年間の空白」にはいろんなものが書き込まれているのであって、最初

からのやり直しができないどころではなく、北朝鮮の24年間が大きな罪責感を蓮池さんたちに負わせつづけることが今後充分予測される。

蓮池さんたちのこれまでの生涯を個人の足跡としてみるなら、北朝鮮に日本人として拉致され、そしてまた日本に朝鮮人として拉致されたというふうを考えられなくはない。北朝鮮に戻るわけにはいかないけれども、さりとて日本にもはや居付くこともできなくなっているという宙吊り状態に、これから蓮池さんたちは晒されつづけるような気がする。エッセイストの中野翠も『サンデー毎日』(02・11・10)の連載で、蓮池さんが「俺の24年を無駄にするのか!」と声を荒らげた、「その気持は、わからなくない。蓮池さんはあちらで亡霊として生きてきたわけではないのだ。世にも数奇で無惨な境遇ではあったけれど、その中にもちゃんと彼の『人生』はあったのだ。」拉致被害者には「脱走もの」の映画で脱走に成功したときの「ああいうカタルシスはなかなか望めないだろう。ことはどんどん複雑になって行く。24年は、あまりにも長かった。」と、彼らのやがて直面するにちがいない深淵に触れようとする。

「おれの24年間を無駄だというのか」と蓮池さんが荒らげる声に、戦時下を過ごしてきた人々のなにもかもが、戦後社会によって否定されていく呻き声が重なって聞こえてくる。「では家族の死は、一体何だったのか。自分の人生は何だったのか」という呟きが、住民の集団自決が各地で起きた沖縄の人々や、復員兵たちや、戦死者の家族たちのなかから湧き起こってくるのがいまにも聞こえてきそう。いうまでもなくその24年間に結婚をし、子供をもうけ、家族をつくってきたのだから、24年間が無駄な筈がないけれども、北朝鮮の実態が次々と明らかにされ、否定すべきさまざまな動きが浮上するなかで、拉致被害者たちが否定されるべき対日工作に24年間も従事させられてきたことを考えるなら、ことはそれほど単純ではない。

蓮池さんたちにはなんの落ち度も責任もなく、いわば日本人の代表のようにして拉致され、日本人を代表するようにして戦前の日本の植民地政策について勉強し、その悪行を反省するかのように、南北統一に向けた対日工作に従事していったことは「仕方がなかった」にちがいないが、人間はそれで済まされるほど単純な生き物ではないのだ。拉致被害者たちが永住帰国を決意した帰国一ヵ月後の11月14日、蓮池薫さんは記者会見で子供の帰国問題に触れつつ、「(拉致問題への関心の高さに)私たちの事件は単なる一個人、一家族の問題でなく、国家間の問題だと強く感じた」と感想を語っているが、いまは「国家間の問題」に覆われているとしても、やがて時間が経ち、マスメディアも沈静化するにつれて、拉致事件は個々人や家族の問題として噴出してくるのは目にみえている。もう外から誰も手を差し伸べることのできない状況のなかで個人としての闘い、家族としての闘いが激しく訪れてくるにちがいないし、本当の意味での拉致問題としての困難で、当事者たち以外誰も触れることのできない課題が深く潜行しているのが感じ取れる。

2002年11月19日記

